

Nonnative speaker English に対する 日本人とアメリカ人の考え方

—1960～80年代資料による肯定論的英語観—

安 達 幸 成

I Introduction

In the 1960s, the word “International English” began to be used. This means that the state of the world began to move toward internationalization. First, I want to see a general view of the state of the world of this time.

The confrontation in the two words born after World War II was beginning to show a sign of relief. In the United States of America, 1961, Kennedy was inaugurated as the President and hold up the new frontier policy and advanced domestic reform and was doing his best in maintenance with Prime Minister Khrushchev of the Soviet Union diplomatically at world peace. The Vietnam War started in 1965, the situation got worse, and the United States was withdrawn from Vietnam in 1973. By the Marshall Plan, in the European countries which escaped from the postwar predicament, also after that, economy developed favorably and economic assistance between countries also progressed. The European Coal and Steel Community developed into the European Economic Community (EEC), and began to carry out liberalization of establishment of common commerce and agricultural policy, capital and labor force movement etc. Against this, the European Free Trade Association (EFTA) centering on Britain was inaugurated. Furthermore, the European Economic Community combined the European Atomic Energy Community and developed into the European Community in 1967.

In Britain, the Labour Party second Wilson Cabinet was born in 1974, Callahan continued in 1976, and it changed to Thatcher the conservatives, from 1979. She advocated popular capitalism and advanced economic revival by reduced budget and privatization of a state. In summer of 1967, Six Day War broken out and the guerrilla

activity by the Palestine Liberation Organization (PLO) continued. In 1968, Organization of Arab Petroleum Exporting Countries (OPEC) reduced the production of the crude, and gave a shock to the world. In china, the storm of the Cultural Revolution Blew violently from 1965, the PRC President system was abolished, and it was changed into unification instruction of the Communist Party of China. The new government corrected the route of the Cultural Revolution sharply after the death of Chou En Lai (周恩来) and Mao Ze Tong (毛沢東) in 1976, and four modernization; national defense, industry, agriculture and technology was aimed at. The PRC President system revived. By the constitutional amendment. Central military commission president Deng shao ping (鄧小平), the general secretary Hu yao bang (胡耀邦), the prime minister Zhao zi yang (趙紫陽), the PRC President La xian nian (李先念) formed the center of a state apparatus. In United Nations, the Beijing regime was able to accept the right of representation instead of the Taipei government in 1971. The Japan-China Peace and Friendship Treaty was concluded in 1979, and diplomatic relations were normalized also with the United States Next year. The American President showed the posture in which the Soviet Union was apposed, instead of Reagan aiming at the revival of the strong United States based on military buildup in the election in 1980. Bush also succeeded the policy in 1989. The United States became an important problem, cumulative debt, drug dealings and the trade friction between Japan and the U.S. Although it entered in the 1980s, technology of Japan progressed further and economy was also continuing stability, subjects, such as the high prices of commodities, abnormal rise of land prices, and tax reform, remained. While such the state of the world was changing violently, also in Japan, the participation to technical innovation was progressing as a member of international society.

Therefore, also in Japan, the exchange between international started quickly with government and people, and it was going into the so-called time of international exchange. In that time, English was a language required for international exchange, and the necessity for English study was anew explained among Japanese people. The word "International English" came to be used in Japan. The category of this language was an interpretation called the so-called Japanese English=broken English. And from the 1970s, "International English" began to be regarded by recognition on a word level as "English as an International Language". The international society of the '70s was the time when the structure began to change quickly. In short article, I want to look at how Japanese and Americans catch to non-native speaker especially at this time respectively by the data from 1960 to 1980. Those days, almost all Japanese worry about how British English and American English should be mastered like a native speaker, and recognized the word "Japanese English" to be broken

English is convertible in self-scorn. It was just going to continue efforts with eager many Japanese researchers and educator, and research also in the present age how native speaker English is approached. However, from the 1960s people who are going to catch Japanese English in the affirmative rather began to appear. In short article, these peoples opinion was what kind of thing, and how it has grown up the originality, identity as Japanese; and independence nature. Looking at them should suggest how to catch the relation with Japanese people and English in the present international society.

II Japanese Englishという概念

日本で英語教育が始められた当時、British English・American Englishという言葉は、英語教育・英語学研究においては一般的にStandard Englishの意味で理解されていた。それに対し、所謂Japanese Englishという言葉は、一般の観念的解釈ではbroken Englishとの認識でしかなかった。しかし、Japanese EnglishをBritish EnglishやAmerican Englishと同じ範疇の一つの異種とする見方もあったようである。

英語という表現には、一般論的解釈としては、イギリス人やアメリカ人が母国語(native language)として使用する側面と英語を母語としない国の人々が国際語(International language)として使用するという両面性があるといえる。

このInternational languageという側面からEnglishをながめると、それぞれの地域における英語は、それぞれの存在意義をもった異種となり得るのであり、日本語とその概念や歴史、文化の影響を受けたJapanese Englishもその異種の一つとなり得るのである。そのため我々日本人自身が、Japanese Englishを受け入れないとするならば、日本人としての独自性・自立性(identity)の欠如を意味するのではないか。

日本における英語学習において、まず音声学的に日本語音声のそれに近い音声を代用音として使い、次第に英語的音声に近づけていくという指導方法も提唱されている。Japanese EnglishがInternational Englishとして通用するための第一条件としては、まずその話者間の会話が円滑に行われるかという点にある。当時の国際交流においては、文化の均等化・民族意識の高まりなどによって、英語文化への同一化は起こりえないと考えられるのが一般的であったため、英米文化にとらわれない、日本人として主体性・独自性のある英語で自己表現できるような英語教育を目指していくべきであるという提唱が起こっていた。

1960年代から1980年代、これらの流れをうけてJapanese Englishの存在を意志伝達の一手段として、これを肯定的に捉える日本人論者たちがいたが、彼らのこうした提唱は、英語教育学的にはもちろん一般的にも承認された説ではなかった。ただ、このような考え方が提唱され始めたことは事実であり、現代においてもその考え方が存在することも事実である。そこには各民族の世界共通言語確立への期待が込められていることの証であると思われる。

寛寿雄は、『現代英語教育』(研究社 1986, 2月12号刊)の「共通の英語と変容の英語」で、次のように主張している。

英語には、英米人の言語としての側面と、情報伝達を目的とする国際共通語としての側面が共存しているといえよう。後者の立場に立てば、各地における英語は、それぞれの存在価値を持った、優劣のない変種であるとも考えられる。

国際共通語としての英語を情報伝達の目的として捉えるならば、それぞれの国での使われている英語は、すべて存在価値があるのであり、我々はその事実を認めていくことが大切であるという。また、鶴見俊輔は、その著『外国語』（1968年 河出書房新社刊）の「日本語と国際語」で、

私的な人間として、国際的な交流と言うものを目指してやって（英語を使って）みよう。つくるものとして、またつくられつつあるものとして言語（英語）を使うという言語哲学に立って、国語教育への道をゆっくりと歩いていこう。

という。彼は英語に対して、このような言語哲学的な捉え方を持っている。この考えの延長上にあるのが、国弘正雄である。彼の自著『英語の話し方』（1970年 サイマル出版会）で、

アメリカ人と同じように英語を話してほしいとか、オックスフォードやケンブリッジを卒業した上流のイギリス人と同じように英語を話してほしいとか言うつもりは毛頭ありません。日本式の英語であっても結構です。

と、日本人の英語が上流イギリス人の使う英語と同じである必要性はないという。この考えを更に勧めて行くと、西山 千の主張となる。彼は、『誤解と理解』（1972年 サイマル出版会）で、

外国人が英語を話しているのを聞いていれば、訛りでだいたいその民族、国籍などがわかる。日本人も当然日本人特有の訛りで話して結構だと思う。わかりやすい日本人訛りの英語を話した方がよい。

という。寧ろわかりやすい日本人訛りの英語を、意思疎通の手段としてどんどん使用すべきであるというのである。これはいわゆる Japanese English コミュニケーション論の主張であり、この主張者には、小田実がいる。彼は1970年刊の自著『私の外国語』（中央公論社 59・65）の「イングリッシュとイングランド」で次のように述べている。

イングリッシュとエスペラントという二つの言葉をくっつけて、『イングラント』と呼ぶ。一種の人工語であって、しかも、英語であるもの。ピジン・イングリッシュをさらに高度にすれば、私の言う『イングラント』になる。

また、世界語としての補助言語ともいうべき英語を鈴木孝夫は、『英語教育』（大修館 1971. 1月4・5）「English から Englic へ」で、国際補助語としての英語 Englic を提唱している

が、この提唱については、次節で改めて紹介する。一方、日本語の影響を色濃くもった英語であるジャパリッシュの提唱を、渡辺武達が『ジャパリッシュのすすめ』(1983 朝日新聞社刊 12)で、

日本語の影響を色濃く持った英語——これを『ジャパリッシュ』と名づけた——を堂々と胸を張って使い、実際の『民族言語環境』の中で交流を生むことこそ、日本人が外国語を学ぶ本来の目的であるはずだ。

と『ジャパリッシュ』の主張をしている。そしてこの主張をさらに進めたのが、中村敬の『私説英語教育論』(1980 研究社刊 172)である。彼は、次のように主張する。

世界には多くの人種が使う様々の英語が存在する。日本人が使う日本人の英語が生まれるのでなければ、永遠にモデルとしての英国英語や米国英語から自由になれないだろう。と言うことは、英国や米国からも自由にはなれないということである。

と言い、日本的言語環境の中から生まれた英語でなければ、永遠に民族英語から自由になれないという見方をしている。むしろ日本人訛りから脱却した英語であるならば、話し手が自己の独自性・主体性を喪失する恐れがあると言い、小川芳男も『話せるだけが英語じゃない』(1981 サイマル出版会刊)で、

訛りから脱却することは不可能だといえますが、仮に脱却できたとすれば、それは既に話し手が自己のアイデンティティーを失ってしまい、根無し草の英語使いになってしまったということです。

と言い、むしろ日本的言語環境から生まれる訛りをなくすることが問題なのであるという。

教育学的には、日本語の音声を代用音として使う段階を設け、徐々に英語的な発音ができるよう指導すればよいという提案を比嘉正範は、『外国語教育の理論』(1978 学研 106.119)の「通じる英語と完全さ」でしている。

日本語にない英語の音声に音韻的にいちばん近い日本語の音声を『代用音』として使う段階を設けることである。代用音を使って英語による表現活動ができるようになってから、徐々に正式な発音ができるようになればよいのである。

国際英語として通用する Japanese English となりうる条件として、意思疎通のための会話が円滑に行なわれることであると、安藤昭一は『英語教育展望』(1978 明甲社刊 12月 36.39)の「Japanese English の許容度」で主張し、さらに宇都宮秀和は、『日本人になる英語教育』(1977 日本YMCA同盟出版社刊)でそれぞれ次のようにいう。

Japanese English (J E) というと、ふつうには悪い英語を連想する。しかし、それとは別にいい J E というか、J E の標準語というか、国際英語として立派に通用するような、積極的な意味をもった J E があってよいはずである。(「Japanese English の許容度」)……コミュニケーションが正しく行なわれる限りにおいて、J E があってもよいであろう。こういう確信が持てるようになった時にのみ、もっと我々日本人は、大きな声で堂々とした姿勢で世界の人達と話せるようになれるであろう。(『日本人になる英語教育』)

また、今日の国際交流においては、英語文化への同化は起こらないのが通常であることについては、遠山淳が『外国語』(1979 日本YMCA同盟出版社刊)の「英語教育と国際語」で、次のように言う。

英語を使用語とする国に植民地化されなかった国々における英語教育では、英語の使用は世界中の文化の異なる人々との交流を可能にした。しかしこの際、英語文化への同化は起こらないのが通常である。

この上に立って中山行弘は、『英語教育』(1982 大修館 5月20.21)の「英語の多国籍化のすすめ」で、

英米文化に縛られない、多国籍化した英語を日本人が理解でき、さらに学習者が日本人として主体性のある英語で、自己表現できるような英語教育を志向すべきであると考えている。

と「日本人として主体性のある英語で、自己表現できるような英語教育を志向」するような英語教育の姿勢を主張している。

III Englic 論

鈴木孝夫は『英語教育』(1971 大修館刊 1月4.5)の「English から Englic へ」で、強く Englic の提唱をしている。

英国固有の文化、文学、世界観と結びついた言語、そしてその分派であるアメリカの言語を English と従来通り呼ぶなら、私が提唱している言語は、Englic とでも interlingua とでも呼びかえるべきだと思う。……今こそ英語教育を英文学者・英語学者の手から切り離すべき時である。そして英語はもはや英語国民の特権的言語ではないことを認識すべきである。

と主張し、更に『閉ざされた言語・日本語の世界』(1975 新潮社)で、現在世界に通用し、理解される言語の研究開発が期待されており、それは British English・American English でもなく、Englicこそがその言語であると彼はいう。

(英語は) イギリス固有の発想と独特のイディオム、発音をもったものである必要は無いし、アメリカのそれである必要もない。それどころか、寧ろそうでないことが望ましいとさえいえる。……第一に英国人でないもの同士が、英語的言語を仲介としなければ、相互に理解し得ないと考えるのは、馬鹿げている。例えば、日本人とフィリピン人が、必死に英国的な発想に支えられた『純粋な英語』を身につけようと、発音にしても慣用的表現にしても出きる限り習熟し……そのあげく、両者がこのイギリス的な言語(・文化)の枠組みの中でようやく相互に意志が通ずるのは奇妙で無駄なことではないか。……第二に、このことが経済性だけは測れぬ精神文化的な重要性をもっていることである。日本人が上手にイギリス的な英語(・アメリカ的な英語)を話すようになるためには、結果的に言って、自分の日本的な独自性・自主性をあちこち切り捨てて修正し、自分を無理にイギリス的(・アメリカ的)な枠に押し込まなければならないことを意味する。しかもそれがたとえうまくいっても、結局は借り物の域を出ない。正しいか間違っているかを決める価値の基準は、あくまで先様が持っているのだから。つまり他人の土俵で相撲をとる羽目になり、こちらの思うこと、考えることをおもいきって大胆にぶちまけることはできない。

と主張している。彼は Englic を定義づけて、『閉ざされた言語・日本語の世界』(1975 新潮社刊 222)で次のように述べている。

自分にとって、外側の存在である英語を、使うものが借り着だという意識を持たず、それを完全に主体的に自信をもって使用するとき、自ずとそこに現れてくる使用者の母国語の影響と、彼の個性が横溢した、英語にして英語にあらざる言語となるのである。

国際共通語としての英語は、可能な限り他の民族言語に対して中性的、つまり第三者的存在としての英語を目指すべきであるという。それは基本的に、ある特定の国の言語を国際共通語とすることは、民族的な公平さを欠くことになり、それ以外の言語が国際共通語としての資格・条件にはふさわしくないということを意味してしまう。しかし、現に英語が国際共通語的な存在であることが事実である以上、私たちにできることは、英語をそれぞれの民族言語や文化の影響を反映させた独自の英語として使うことが、そのあるべき姿としての不公平さを補う一つの解決法なのかもしれない。民族的歴史的に発生した言語の一つである英語を、そのまま国際的共通語とし認定するのではなく、英語以外の民族的歴史的な発生言語民族の人々が参加して、国際共通語的な英語を作っていくのが一番よいはずである。現時点では、すべての民族にとって、等距離に位置する公平で理想的な人工の世界共通語または国際共通語が存在しないという現実と、英語という一つの自然発生的言語が歴史的偶然によって、い

ま事実上の世界共通の言語となっているという事実を踏まえた上で、英語を国際的共通語と認めるならば、英語を母語としない国民に残された選択肢は二つしかないのではないか。それは第一に、英語を母語とする国民にのみ有利な、そして英語を母語としない国民には大変不利な条件を要求するかたちで、世界的相互理解を確保するという方法、そして第二に、英語を母語としない国民が、英語をそれぞれ自分たちの民族に有利なところに取り入れ、英語を母語とする国民にも、また英語を母語としない国民にもそれぞれ相互の理解と努力と負担を要求する方法である。

以上のような主張や提唱による論拠によって、International Englishをとらえるならば、Japanese EnglishやEnglicなどは、British English・American Englishと同じ範疇にある異種という解釈ができることになる。この意味でJapanese Englishの使用と活用を主張することは、日本人としての独自性・主体性を維持することにもなり、今後益々英米文化に縛られない、日本人として独自性・主体性のある英語を使った自己表現ができるような英語教育を目指していくべきである。

IV International English 観の変化

前で述べたようなJapanese Englishの肯定論に対して、未だ殆どの日本人は、British EnglishやAmerican Englishが一番の模範英語と信じ、英語を母国語とする人々の発話に近づこうと日々努力しているのが事実である。このことは、英語を母語としない人々が使う英語を、broken Englishなどと軽視して捕らえがちであることからわかる。英語を母語として使用していない者は、native English speakerとはなれず、生涯にわたってnon-native English speakerなのである。

そこで1970年代に入り、イギリス人・アメリカ人の中からNon-native English speakerに対して、それを英語のひとつとして受け入れなければならないと考える人々が現れはじめた。英語はあくまでも世界の中の一言語なのであり、同時に多くの異種英語が存在するのは民族的歴史的に当然である。その意味で言語としての英語は、脱国家的中性的になり得るし、そうしなければならないと彼らはいふ。つまり、英語とは、基本的にBritish English・American English至上主義であってはならず、世界共通言語としてそのような言語的偏見は許されないものである。

国際社会構造がめまぐるしく変貌する70年代にはいり、International Englishは国際的言語としての英語として研究され始めた。国際語としての英語(English as an International Language=EIL)を提唱している中心的人物であるアメリカ国立東西センターリサーチ研究員Larry Smithの言語認識観をみておきたい。

彼は1976年にEIL=English as an International Language、そしてEAL=English as an Auxiliary Languageという言葉を作り出した。彼は『RELC Journal』(1973 7-2: 38-53)で英語を各国各地の人々がお互いの意志伝達のために用いるものであると定義し、もっとも頻繁に用いられる国際共通言語、即ち国際語としての言語であるとしている。またEALは、ある国の人たちだけが国内での意思伝達を図るための英語、即ち国内語としての英語と定義

した。ここで彼は、英語というものはひとつの言語であるが、同時に数多くの異種 (variety) があり、加えて英語は脱国家化 (de-nationalized) できるし、そうしなければならないという。換言するならば、British English・American English 絶対型言語観を内包する EIL=English as an International Language・EAL=English as an Auxiliary Language としただけでなく、国際共通的言語・国内語としての英語の視点からも捉え直さなければならないという。更に、国際的に相互の理解を図るために英語を使用する場合、母国語話者 (Native English speaker) も非母国語話者 (non-native English speaker) と同様の訓練が必要であり、そこには言語的排他主義 (Linguistic chauvinism) の入り込む余地はないという。Smith, L. は、『Culture Learning Institute Report』で「Some Distinctive of EIL vs. ESOL in English Language Education」について、EIAL (English as an International Auxiliary Language) から EIL=English as an International and an International Language にことばを変更したが、彼の言語観が変わったわけではないのである。

By an international language I mean one which is used by people of different to communicate with one another. By international language I mean a language other than the mother tongue, which is used by nationals of the same country for communication.

Marckwardt, A. (1963) English as a Second Language and English as a Foreign Language. PMLA, 78 (2): 25-28

Larry Smith の主張しているのは、次のような内容である。

International communication としての英語は、speaking や writing にかかわらず、non-native English speaker だけでなく native English speaker も円滑な意志疎通を図るために努力しなければならない。English as an International Language=EIL は、さまざまな国の native speaker English 同士、native English speaker と non-native English speaker、さまざまな国の non-native English speaker 同士の間で使用されているという現実を認識しなければならない。したがって、文化的な重点は、学習者の関心・興味やニーズに合わせた特定の文化に置かれなければならない。学習者がテキストとして提示される英語は、教養ある英語 (educated English) であれば、native speaker English のものでも non-native speaker English のものでもよい。学習者の習得すべき対象は、通じる英語 (intelligible English) と適切な英語 (appropriate English) である。換言すれば、英語を English as a Foreign Language=EFL、English as a Second Language=ESL とか呼ぶのをやめ、English as an International Language=EIL と呼ぶべき時期にきているのである。英語を母語とする native speaker も話し言葉と書き言葉の両面において、英語の異種を学ぶ必要がある。同時に、日本人も他の英語を母語としない non-native speaker の英語の異種やその文化的背景にあるものを学習する必要がある。学習対象が教養のある英語であれば、native speaker English のものでも non-native English speaker のものでもよい。要は国際的にコミュニケーションが可能となる英語が必要なのである。

V 国際語としての英語=English as an International Language=EIL

英語の native speaker がこのように主張するようになった背景にはどのような事情があったのであろうか。そこにはさまざまな言語的・社会的・民族的・利害的・政治的・宗教的・歴史的な諸要因が複雑に多元的に入り組んでいると思われる。ただ一般論的一元的な要因としては、次のような諸点が考えられる。

- ①かつて被植民地であった国家では、英語を母語とした旧宗主国の社会的や文化的諸影響を受け、その土地のいろいろな要素が混入し、その土地でのみ通話が可能となっていた英語の異種が既に存在していたこと。
- ②被植民地からの独立以後、民族意識の高まりにより、その国の民族言語の復活とともに、かつての支配者が英語であった場合、そこで話された英語の異種が更に複雑に多様化し、その言葉が残っていること。
- ③多様化し、特殊化したそれら英語の異種に対する英語を母語とする native speaker の態度が、次第に寛容の方向に向かっていること。

このような要因から Lester, M. も、英語を母語としない non-native speaker が習得すべき対象は、意志疎通の見地から native speaker English である必要もなく、また独自性・自立性を見地からもそうあるべきでなく、International Englishこそが学習対象でなければならないとし、次のように述べている。

Communication needs: For most people the purpose of learning any language is communication. When sufficient skill has been developed to meet the learner's communication needs, there may be little motivation for the learner to master increasingly idiosyncratic details, especially when they play a relatively small role in communication.-an example from English would be the complete mastery of the uses of articles.

Cultural factors: The second factor is the need to maintain a balance between linguistic magic a person were given native speaker ability in a foreign language. That person would know how to talk like a native but he would not know how to behave like a native. A foreign accent is signal to the native speaker that the person with the accent cannot reasonably be expected to share the jokes, allusions and mores that are common coin to all people brought up in that culture.

Identity: The third factor that operates against second language learners endeavouring to develop native speaker ability. Native speaker English is the language of individuals in specific countries. Some learners acquire English with the wish of identifying with the people and culture of an English speaking country-immigrants probably being the largest group of this type. However, the vast majority of English learners around the world have no wish to detach themselves from their own cultural national identity and form a new identity with the

people and culture of a specific English speaking country.

In many parts of the world English is still regarded as the language of a colonial power.

In this period of decolonization to aspire to native speaker proficiency in English is to reject local identity. The great advantage of international English is that it is not readily identified with a single country.

Lester, M..(1978) International English and Language Variation. *English as an International Language*. London: The British Council, 6-24.

英語を母語とした民族に基盤をおいた言語観ではなく、特定の文化・思想に縛られない国際共通語としての英語の確立により、異種民族間の意志疎通を円滑にすることによって、多くの誤解や偏見を減らし、最終的には異種民族間の平和的共存に寄与したいというのが English as an International Language=EILの目的だという。

しかしこの提唱が、英語を母語とする native speaker 側のものである以上、われわれ英語を母語としない non-native speaker 側からは、何故か素直に受け入れられない感がある。疑心暗鬼になっているのか、ともすれば英語の異種の多様化に対する native speaker 側の牽制とも考えられる。さらに政治的にも native speaker と non-native speaker との意志疎通が英語で行なわれることが、native speaker 側にあきらかに有利な条件がつくられるとの判断による言語戦略ではないかという憶測も考えられる。さらに追求するならば、EILの背景には、政治力学の変質があるのではないか。かつて英語とは、大戦前はイギリス、戦後はアメリカという西側世界の覇者が世界を管理する言語であった。さらには文明先進国が後進国を教育し、指導し、援助する言語であり、政治・軍事・経済大国が弱小国に命令する言語であった。しかし現在の国際社会の構造、民族意識と独立意識の高まりにおいて、世界の民族国家の構図と国際社会情勢からその概念は急速に崩壊しつつある。

ただ、このような諸点に対する明確な根拠を挙げることは難しいが、native speaker の non-native speaker に対する態度が、以前に比較して寛容になってきたことは事実である。

国際語としての英語 English as an International Language=EILについてみてきた。これは国際語としての英語なのであり、国際的意志疎通のための英語なのである。British English・American English 支配型である民族語としての英語である English as a Native Language に対立する英語観であるといえよう。英語は、一つの言語であると同時に数多くの異種も存在する。また、英語は脱英米化できるし、またそうしなければならない。国際的に相互の理解を図るために英語を使用する場合、native speaker 側は non-native speaker 側と同様の努力が必要であり、そこには言語偏見の炒りこむ余地はない。われわれ日本人も他の non-native speaker の英語の異種や文化的背景を学習する必要がある。その際の英語は、native speaker のものでも non-native speaker のものでも、教養のある、国際的に通じる英語ならどちらでもよいのである。

VI ま と め

現在の世界共通語としての役割の場にいる英語は、もともと民族的歴史的に発生した言語であり、この一つの言語が様々な要因によって多数の異種を生むに至った。そのそれぞれの異種は、それぞれの地域や民族のなかで独自性を持った英語となったのである。観点を変えて表現するならば、いわゆる英語の多国籍化とも考えられる。

多国籍英語とは、様々な国の人々がお互いの意志伝達のために用いる英語で、アメリカ・イギリスへの言語的同化・文化的同化が必ずしも要求されない英語である。この言語使用は、①様々な国の native speaker 同士 ② native speaker と non-native speaker ③ 様々な国の non-native speaker 同士の間で行なわれている。近年、non-native speaker 同士の英語使用が増えている。言語が持っている文化は、その国の文化に重点が置かれなければならない。英語の文化はアメリカの文化やイギリスの文化だけではなく、アジア・アフリカ・ヨーロッパの文化も含むのである。われわれ日本人が習得すべき目標は、現在 non-native English speaker 側にいる以上、民族英語を習得することは不可能であり、その必要もない。自立性を維持するためにも習得すべきではないとも言える。その地域固有の妥当な英語 = an indigenous variety of valid English でいいのである。日本人が学習すべき英語は、国際的に通用する適切な英語であれば、native speaker のものでも non-native speaker のものでもよい。むしろ、アメリカの英語やイギリスの英語だけでなく、むしろこれからはアジア・アフリカ・ヨーロッパの英語にも触れていかなければならない。英語の non-native speaker のみならず native speaker も円滑にコミュニケーションを図るため日々努力しなければならない。すなわち、必要なのは英語における相互主義の提唱である。

References

- ・ 筧 寿雄 (1986.2.12) 『現代英語教育』 研究社
- ・ 鶴見寿雄 (1968) 『外国語 日本語と国際語』 河出書房新刊社
- ・ 国弘正雄 (1970) 『英語の話し方』 サンマル出版会
- ・ 西山 千 (1972) 『誤解と理解』 サンマル出版会
- ・ 小田 実 (1970) 『私の外国語』 「イングリッシュとイングランド」
- ・ 鈴木孝夫 (1971) 『英語教育』 大修館
『閉ざされた言語・日本語の世界』 新潮社 222
- ・ 渡辺武達 (1983) 『ジャパリッシュのすすめ』 朝日新聞社刊 12
- ・ 中村 敬 (1980) 『私説英語教育論』 研究社 172
- ・ 小川芳男 (1981) 『話せるだけが英語じゃない』 サイマル出版刊
- ・ 比嘉正範 (1978) 『外国語教育の理論』 学研 106.119
- ・ 安藤昭一 (1978.12) 『英語教育展望』 明甲社刊 36.39
- ・ 宇都宮秀和 (1977) 『日本人になる英語教育』 日本YMCA同盟出版刊
- ・ 遠山 淳 (1979) 『外国語 英語教育と国際語』 日本YMCA同盟出版刊
- ・ 中山行弘 (1982.5) 『英語教育』 大修館 20.21
- ・ Larry Smith (1973) *RELC Journal* (7-2 : 38-53)
Culture Learning Institute Report
- ・ Marckward, A. (1963) *English as a Second Language and English as a Foreign Language* PMLA, 78 (2) : 25-28
- ・ Lester, M. (1978) *International English and Language Variation. English as an International Language*, London : The British Council, 6-24